

---

---

研究ノート

---

---

和アートセラピーの気分変容効果に関する研究  
- 高齢者介護福祉施設における調査から -

中村 将吾<sup>1)\*</sup>, 吉武 尚美<sup>2)</sup>

【要 旨】

本研究の目的は、高齢者を対象に和アートセラピーを実施することで気分になどのような変化が見られるか検証する。和アートセラピーは、和紙や着物、墨、折り紙などを使用した創作活動を通じて心理的な変化を促す手法である。対象は、高齢者福祉施設の入所者 33 名で、POMS 簡易版を使用して介入前後の気分の変化を評価した。結果、介入後に「ゆううつ感」において有意な減少 ( $\chi^2(3) = 10.40, p = .015$ ) が確認された。一方、「イライラ」については減少傾向が見られたが、有意な変化は認められなかった。また、「活力」については上昇傾向が観察されたが、他の項目（「不安」「混乱」「疲れ」）においては有意な変化は確認されなかった。これらの結果は、和アートセラピーが一部の感情に影響を与える可能性を示唆するものの、心理的变化には個別の要因や交絡要因が影響している可能性があり、さらなる研究が必要であることを示している。

キーワード：アートセラピー、高齢者、気分変容

---

---

Research Notes

---

---

**The Effects of Japanese-Style Art Therapy on Mood States:  
A Study in Elderly Care and Welfare Facilities**

Shogo NAKAMURA<sup>1)\*</sup>, Naomi YOSHITAKE<sup>2)</sup>

【Abstract】

This study investigates the effects of "Japanese Art Therapy," utilizing traditional Japanese materials such as washi paper, kimono, ink, and origami, on the mood and emotional state of elderly individuals. The therapy aims to promote psychological change through creative activities. A total of 33 participants from elderly care facilities were assessed using the POMS (Profile of Mood States) before and after the intervention. The results showed a significant reduction in "depression" ( $\chi^2(3) = 10.40, p = .015$ ). While "irritability" showed a downward trend, no significant change was found. Additionally, there was an observed increase in "vitality," but no significant changes in "anxiety," "confusion," or "fatigue." These results suggest that Japanese Art Therapy may positively influence certain emotions, though individual and confounding factors may affect the psychological changes. Further research is needed to clarify the broader effects of this therapy.

**Key words:** Art Therapy, Elderly, Mood Change

---

<sup>1)</sup> 順天堂大学・国際教養学部 (Email: int7123165@stud.juntendo.ac.jp)

<sup>2)</sup> 順天堂大学・国際教養学部 (Email: n-yoshitake@juntendo.ac.jp)

\* 責任著者：中村将吾

[2025 年 9 月 23 日原稿受付] [2026 年 1 月 27 日掲載決定]

## 1. 緒言 (背景と目的)

言葉ではなく、芸術を媒体として行う心理療法の1つにアートセラピーがある。絵画、造形、コラージュ、音楽、ダンスなど、様々な芸術形態を通じて心の健康をサポートする方法で、芸術活動は治療効果があるという理念に立つ(関, 2004)。アートセラピーの特徴と効果として、瀬崎(2007)は、①自己表現と開放(言葉で表現しづらい感情や考えを具体的な形で表現することができる)、②心身の健康回復(物づくりの楽しさや達成感が生活の質を高める)、③自己理解と成長がある(創作活動を通して自己理解を深め、個人の成長が促される)を挙げている。アートセラピーは、行為障害や精神の不調を抱える人、学習障害や身体障害のある人、終末期の患者、脳損傷や神経障害のある人、およびストレスケアや自己開発を求める人など、幅広い年齢層や様々な状況にある人々に適用されている(岸田・大谷, 2010)。実施の形態は、個人またはグループで行うことができ、クライアントの芸術的な経験や専門知識を必要とせず、心理療法としてだけでなく、リクリエーション活動として様々な場面で実施されている(稲村, 2017; 兼子, 2019)。

印刷物を切り抜いて台紙に貼りつけて作品を作る手法をコラージュ療法と呼び、言語化が難しい内的イメージや感情を、選択・切断・配置というプロセスを通じて外在化することで、自己理解や情緒の安定、気分調整を促すとされる(岡田・河野, 1997)。本研究は使用する素材に日本独自の要素を取り入れた「和アートセラピー」を実践し、その効果を検証する。和アートセラピーとは新たなアートセラピーの形態であり、和紙、着物、墨、折り紙など日本文化に根ざした素材や手法を用いたコラージュの創作を通じて気分の変容を促すものと定義する。アートセラピーの実践やその研究に関する知見は蓄積されているが、特定の文化的背景に基づくセラピーのもつ心理的効果を探る研究は少ない(甲南大学人間科学研究所, 2012)。文化的

な要素が心理的効果に与える影響は、単なる視覚的な美しさや素材の独自性を超え、参加者の内面的な体験に深く関与する可能性があるため、文化的要素を加味したアートセラピーの価値を科学的に検証する意義は大きいと考える。

本研究の目的は、高齢者を対象に和アートセラピーを実施することで気分がどのような変化が見られるか検証することである。我が国の高齢化率は急速に上昇し、2025年には30%を超えると予想されている(国立社会保障・人口問題研究所, 2023)。高齢化に伴い高齢者自身の孤独や健康問題も社会的な課題として注目されている。したがって、本研究により、慣れ親しんだ素材を用いた独自のアートセラピーを通して高齢者の生活の質の維持と向上に寄与できるだけでなく、高齢者を対象としたアートセラピーに関する臨床心理学、健康心理学への学術的貢献をも果たせると考える。

## 2. 方法

### 1) 調査対象者

高齢者福祉施設の入所者および通所者のうち、要介護3以下であり、同意取得時に65歳以上で本人の自由意思による回答が可能である者を対象とした。

### 2) 手続き

研究対象施設のリクルートのために、研究者が事前に選定した候補施設へ電話での勧誘を行う。関心を示してくれた施設へ直接訪問し、研究の目的・概要を説明した上で、研究参加の同意を取得する。

和アートセラピーは1セッション60分とする。最初の10分間で活動の説明と同意取得を行い、心理尺度を用いて気分状態の聞き取りを行う。続く40分を創作時間とし(後述)、残り10分間で感想を尋ねると共に、再度気分状態を聞き取る。ただし、施設長と相談の上、認知機能や巧緻運動能力の状態により同意取得が代理人となったり、セッションの時間が前後する

ことがある。気分状態の1回目聞き取り調査は、活動説明および研究参加の同意取得が終了した時点で実施した。具体的には、入居者2名につきスタッフ1名を補助として配置し、スタッフが各項目を口頭で読み上げ、対象者の口頭での回答を記録した。創作活動終了後には、2回目の気分状態測定を1回目と同様の手続きで実施し、介入前後の気分状態の変化を確認した。

また、和アートセラピー終了後には、まず対象者に対してセッション全体の感想や活動中の心身の状態について個別にインタビューを行った。続いて、当該セッションに同席したスタッフに対しても、対象者の様子や介入に対する印象等についてインタビューを実施した。実施時の様子を図1に示した。

以下に40分間の和アートセラピーの実施詳細を述べる：

①素材の事前セッティング：創作活動に先立ち、作業机に和アート素材とりのり、はさみをセッティングし、参加者による創作中の移動はないようにする。机にはまた完成品も展示しておき、参加者は席に着くなり完成品を見てこれからの作業についてイメージできるようにする。

①作業説明：開始時刻になったら素材説明を

口頭で行い「自分の世界をお好きなように作ってください」と教示を行う。

②創作開始：創作中に参加者との会話の機会があれば積極的に関わる。手指の自由が利かない人に対しては研究協力者が作業補助を行う。色に関する思い出や、モチーフに関するエピソードなどを語る参加者には、研究協力者が質問をして世界観を広げていく。研究協力者1人あたり3人までの対象者を担当する。

③作業の終了：40分をめぐりに終了を告げる。作品は参加者に持ち帰ってもらう。

### 3) 使用尺度

気分の測定にはPOMS短縮版(Profile of Mood States; 横山, 2000)を用いた。POMSは気分、感情、情緒を自己評価する質問紙検査である。今回用いたものはこの簡易版で、被検査者の負担を軽減し、なおかつ結果の信頼性は正規版とほぼ同程度に高いとされる(川出, 山本, 大橋, 日比野, 2011)。本研究では「不安」「ゆううつ」「イライラ」「活力」「疲れ」「混乱」の6下位尺度を用いた。質問項目の一覧を図2に示す。



図1. 和アートセラピーの様子

- 問1. 不安感を自覚していますか  
 ① ほとんどない ②あった ③かなりあった  
 「不安だ」などの不安感を表す。
- 問2. ゆううつな気分を自覚していますか  
 ① ほとんどない ②あった ③かなりあった  
 「憂鬱だ」など自信喪失感を表す。
- 問3. イライラ感を自覚していましたか  
 ① ほとんどない ②あった ③かなりあった  
 「怒る」「イライラする」など怒りを表す。
- 問4. 活力はありましたか  
 ① ほとんどない ②あった ③かなりあった  
 「生き生きとする」など元気さ、躍動感、活力を表す。
- 問5. 身体的な疲れを自覚していましたか  
 ① ほとんどない ②あった ③かなりあった  
 「ぐったりする」など意欲減退、活力低下、疲労感を表す。
- 問6. あれこれ考えこんでしまうことがありましたか  
 ① ほとんどない ②あった ③かなりあった  
 「頭が混乱する」など当惑を表す。

図 2. POMS 簡易版

### 3. 結果

分析対象者は 33 名であった (男性 25 名、女性 8 名)。年齢構成は 70 ~ 79 歳 2 名、80 ~ 89 歳 17 名、90 歳以上 12 名であり、無効回答が 2 名であった。

#### 1) 気分評定項目の変化

介入前後の調査参加者の気分の変化を見るために項目ごとの平均値を図 3 に示した。

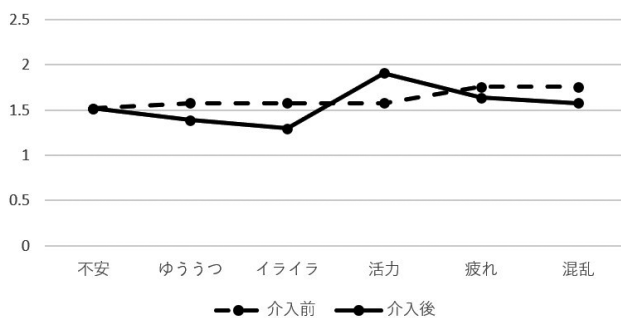


図 3. POMS の回答状況

図 3 に示すように、各指標において介入前後で変化の傾向がうかがわれた。「ゆううつ」および「イライラ」は介入後に低下傾向が示唆され、とりわけ「イライラ」では減少方向の変化が相対的に目立った。このことは、介入が情動面にポジティブな影響を及ぼしたことを示唆している。さらに、「活力」は介入後に上昇したことが示唆され、対象者における心理的エネル

ギーや積極性の向上が反映されたと考えられる。これはポジティブな心理資源が高められたことを示唆するものであり、介入の効果として注目に値する所見である。一方で、「疲れ」および「混乱」に関しては、全体的に軽度の減少傾向はみられたものの、大きな変化は確認されなかった。また、「不安」にも大きな変化は認められず、介入による影響は限定的であることが示唆された。

#### 2) 回答分布に見られる気分変容の効果

各設問 (Q1 ~ Q6) について、介入前後の回答分布の変化を Bowker の対称性検定により検討した。「ゆううつ」において有意な変化が認められた ( $\chi^2(3) = 10.40, p = .015$ )。また、「イライラ」では有意水準には達しなかったものの、有意傾向が示された ( $\chi^2(2) = 4.77, p = .092$ )。一方、「不安」、「活力」、「疲れ」、「混乱」については有意な変化は確認されなかった。回答に有意な変化が認められた Q1 と Q2 について回答の移行パターンを可視化したクロス表を表 2 に示した。介入前のある回答をした人が、介入後にどこに移行したのかを表している。表の対角線上 (1 → 1, 2 → 2, 3 → 3) は「変化なし」、対角線以外のセルは「変化あり」を意味する。また、1-ほとんどない、2-あった、3-かなりあった、を意味する。

「ゆううつ」においては「介入前 = 2 (あった) → 介入後 = 1 (ほとんどない)」への移行が顕著に多く、1 (ほとんどない) → 2 (あった) への変化は 1 人にとどまり。回答分布が偏って変化したと判断された ( $\chi^2(3) = 10.40, p = .015$ )。このことから、当該設問に関してはより肯定的な選択肢へのシフトが生じたことが示唆される。「イライラ」においても同様に「2 (あった) → 1 (ほとんどない)」への移行が比較的多く観察されたが、統計的には有意水準に到達しなかった ( $\chi^2(2) = 4.77, p = .092$ )。他の設問 (Q1, Q4 ~ Q6) については、回答分布の対称性が保たれており、明確な変化は認められなかった。

表 1. 介入前後の回答分布の Bowker 検定結果

	$\chi^2$	df	p
Q1 不安	3.00	3	.39
Q2 ゆううつ	10.40	3	.02
Q3 イライラ	4.77	2	.09
Q4 活力	6.00	3	.11
Q5 疲れ	1.15	2	.56
Q6 混乱	3.07	3	.38

### 3) 気分評定得点の変化

POMS のネガティブ気分を表す 5 項目の平均得点に介入前後で変化が見られるか検討するため、Wilcoxon 符号付順位検定を実施した結果、介入前と介入後の気分得点に有意な変化は認められなかった ( $Z = -1.02, p = .307$ )。

### 4) 調査対象者のインタビュー

セラピー終了後に参加者へのインタビューを実施した。その結果、介入に対して概ね肯定的な反応が得られ、参加者の情動や社会的交流、自己効力感に対する影響が示唆された。「昔のことを思い出して楽しかった」「良い記念になった」との発言があり、過去の思い出を回想することで、心理的な満足感や喜びを得ていたことがうかがえる。また、作業を通じて「疲れもとれた」「やりきった感がある」と述べる参加者もあり、介入が達成感や自己効力感の向上に寄与した可能性が示唆された。加えて、参加者から「また来てね」との発言もあり、セラピーへの意欲や満足度が高かったことが確認された。これは、介入が単なる一時的な活動にとどまらず、参加者にとって継続的に関わりたいと感じる心理的価値を提供したと考えられる。

施設スタッフの観察によれば、参加者の表情は普段より明るく、活き活きとしていた。また、普段は手をあまり動かさない参加者が自発的に作品制作に取り組む姿や、制作過程での会話の増加も確認され、社会的交流が促進されていたことが報告されている。さらに、和アートセラピー中には、参加者が和に関連する自身の過去

表 2. 回答 (Q2, Q3) の移行パターン

	Q2 (介入後)			Q3 (介入後)		
介入前	1	2	3	1	2	3
1	14	1	2	13	3	0
2	9	4	0	10	5	0
3	0	2	1	1	0	1

注) 1: ほとんどない、2: あった、3: かなりあった

の体験を語り合う場面も多く見られた。具体例として、ある参加者は「昔、呉服店で働いていたときのことを思い出して楽しかった」と語り、別の参加者は「着物の着付けをしていたことを思い出した」と述べた。また、家族で受け継がれている着物の話題や、裁縫作業の経験に基づく「久しぶりにこういうことができている嬉しい、思い出せた」といった発言も観察された。このように、参加者は過去の出来事を再体験するように語り合い、場の雰囲気は明るく活気に満ちていた。さらに、セラピー終了時には一部の参加者が涙を流す場面も観察され、介入が深い情動的影響を及ぼした可能性が確認された。

これらの結果から、和アートセラピーは過去のポジティブな記憶の喚起、社会的交流の促進、自己効力感の向上に寄与するだけでなく、参加者の継続的な関与と意欲を高める効果も持つことが示唆される。

## 4. 考察

本研究の目的は、高齢者を対象に和アートセラピーを実施することで気分にどのような変化が見られるか検証することにあつた。研究の結果、和紙を中心とした日本の伝統的な素材や技法を活用した創作活動は、参加者に対して一定の心理的变化をもたらす可能性が示唆された。

POMS の 6 つの項目のうち、介入後、参加者の「イライラ」や「ゆううつ感」のスコアが減少する傾向が見られた。特に、「ゆううつ感」は、介入前に中程度であった参加者が、介入後に軽度に移行する傾向が確認された。この結果は、

和アートセラピーがネガティブ感情の軽減に一定の効果を持つ可能性を示唆している。しかし、「不安」「疲れ」「混乱」に関しては、有意な変化は見られなかった。また、POMSによるネガティブ気分全体の統計解析でも、有意な変化は確認されなかった。一方で、参加者への介入後のインタビューでは、介入に対して肯定的な反応が見られた。

本研究の結果から、和アートセラピーは高齢者の気分や感情状態に一定の影響を及ぼす可能性が示唆された。特に、ネガティブ感情の一部である「イライラ」や「ゆううつ感」が軽減される傾向が確認され、これは和アートセラピーの有効性を裏付ける重要な知見であると考えられる。一方で、「不安」や「疲れ」といった項目については有意な変化が認められなかったことから、本研究の範囲においては特定の情動に対して選択的に効果を示す可能性があることも明らかとなった。また、和アートセラピーが感情の深層に働きかける可能性も示唆された。参加者が創作活動を通じて過去の出来事を再体験し、感情の解放を感じることができた点は、今後の研究でさらに詳しく検討する価値がある。特に、和アートセラピーが記憶や過去の感情を呼び起こし、情動的な効果をもたらすことがわかった。このことは、高齢者にとって重要な心理的支援となる可能性があることを示唆している。ただし、全体的な気分の変化に関しては即効的な改善が見られなかったため、より長期的な介入が必要であると考えられる。

#### 4.1. 研究の限界と今後の展望

本研究にはいくつかの制約が存在する。第一に、サンプルサイズが33名と小規模であったことは、統計的検出力や結果の一般化に制約を与える要因となった可能性がある。今後は、より大規模な対象者を用いた研究を行うことで、和アートセラピーの介入効果の再現性や信頼性を高めることが求められる。

第二に、本研究では介入が1回のセッション

と短期的であったため、得られた心理的効果の持続性については不明である。和アートセラピーのような創作活動は、短期的な気分変化をもたらすことはあっても、その効果が時間とともに維持されるかどうかは明らかではない。したがって、長期的な介入研究やフォローアップ調査を実施し、心理的効果の持続性を検証することが望まれる。また、和アートセラピー特有の効果を厳密に検証するためには、一般的なアートセラピーとの比較研究を行い、どの点で効果に差異があるのかを明らかにすることも重要である。

第三に、評価手法に関する制約も存在する。本研究ではPOMS短縮版を3段階評価で用いたが、この方法では参加者の微細な心理的变化を十分に捉えることが難しい可能性がある。生理的指標の使用や測定方法を工夫することで、より精緻なデータを取得し、介入効果の実態を正確に把握することが重要である。

さらに、本研究の結果からは、不安や混乱といった気分は、和アートセラピー単独では十分に改善されない傾向が見られた。これらの情動は、心理的要因のみならず、身体的・認知的要因や生活環境の影響も受けることが考えられる。

以上の限界を踏まえると、今後の研究では、対象者規模の拡大、介入期間の延長、評価手法の精緻化、個別特性に応じた多面的な介入の検討、そして一般的なアートセラピーとの比較検討が不可欠である。これにより、和アートセラピーの心理的効果をより科学的に検証し、高齢者の心理的健康に対する実践的応用の可能性をさらに高めることが期待される。また、今後は介入内容を個別化し、参加者の状況に応じたアプローチを取ることで、効果を最大化できる可能性がある。和アートセラピーの長期的な効果を検証するためには、複数回のセッションを行い、参加者の心理的变化を追跡することが今後の研究課題となる。

## 4.2. 実践的意義と将来の応用

和アートセラピーは、高齢者福祉施設における心理的支援法として有効である可能性が示唆された。特に、和紙や日本の伝統的素材などの文化的要素を活用した創作活動は、参加者の情動の調整や心理的安定を促進し、生活の質の向上につながると考えられる。参加者が素材に触れる過程や制作に没頭する経験は、単なる創作活動に留まらず、自己表現や達成感、深い郷愁や安心感といった心理的資源の増強に寄与する可能性もある。

今後は、こうした和アートセラピーの効果を、他の高齢者福祉施設や医療機関など、異なる現場で検証することが重要である。導入環境や対象者の特性による効果の違いを明らかにすることで、介護・福祉現場での実践的活用をさらに促進できると考えられる。また、和アートセラピーの手法や素材を工夫することで、高齢者以外の集団への応用可能性も広がる可能性がある。異なる文化背景を持つ人々や、発達段階や心理的ニーズが異なる集団への適応可能性を検討することにより、アートセラピーの新たな展開や、多様な環境での実践的応用の幅を模索することが期待される。

さらに、将来的には、定量的評価と質的評価を組み合わせた研究を進めることで、創作活動が心理的健康や情動調整に与える影響のメカニズムをより詳細に解明できると考えられる。これにより、施設内での心理的支援だけでなく、地域社会全体における高齢者の QOL 向上に貢献する新たなプログラムの開発にもつなげることが可能となるだろう。

## 5. 結論

本研究では、高齢者福祉施設の入所者 33 名を対象に、和紙や着物、折り紙など日本の伝統的素材を用いた和アートセラピーを実施することで気分になどのような変化が見られるか検証した。和アートセラピー 1 セッションが気分状態に及ぼす影響を、POMS 簡易版およびインタ

ビューを用いて検証した。その結果、「ゆううつ感」の回答分布には有意な低下が認められ、「イライラ」や「活力」にも改善傾向が示唆された一方で、ネガティブ気分全体の得点については統計的に有意な変化は確認されなかった。

しかし、インタビューやスタッフの観察からは、過去のポジティブな記憶の喚起、社会的交流の促進、達成感や自己効力感の向上など、参加者の気分肯定的な変化が生じていたことが示された。以上の結果から、和アートセラピーは、高齢者の一部の感情面や主観的体験に対して短期的な改善をもたらし、高齢者福祉施設における非薬物的心理支援の一選択肢となりうる可能性が示唆された。もっとも、本研究の見解は予備的なものであり、その効果の範囲と強さを明らかにするためには、サンプルサイズの拡大や介入デザインの工夫を含む今後の検証が必要である。

## 6. 謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々のご支援とご協力をいただきました。まず、研究を行うための貴重な施設をご紹介いただいた湯浅資之教授に感謝申し上げます。さらに、施設の提供と支援をしてくださった社会福祉法人函要会理事長 杉山 潔 様、施設長 杉本 知敬 様にも深く感謝いたします。

また、本研究の遂行にあたり、データ収集に関する諸調整や日程調整、事務手続きなど運営面で多大なご支援をいただいた田中 悠太様にも心より感謝申し上げます。皆様のご支援とご協力があったからこそ、本論文を完成させることができました。

## 7. 倫理・利益相反の記載

本研究は、順天堂大学倫理委員会の承認を得て実施された（順天国倫第 0033 号）。研究に参加したすべての被験者からインフォームド・コンセントを取得し、倫理的配慮のもとで行いました。また、本研究においては、利益相反は存

在しない。

#### 引用文献

Csikszentmihályi, M. (1990). *Flow: The psychology of optimal experience*. Harper & Row.

稲村めぐみ. (2017). ターミナルケアにおける芸術療法. 東京大学宗教学年報, 35, 129-142.

甲南大学人間科学研究所. (2012). アートセラピーの現状と課題: アンケートとインタビュー調査から. 甲南大学人間科学研究所報告書.

岸田由佳・大谷正人. (2010). 特別支援教育におけるアートセラ皮的アプローチの可能性. 三重大学教育学部研究紀要 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学, 61, 219-249.

川出英行, 山本直人, 大橋洋平, 日比野美紀.

(2011). 似顔絵セラピーによる気分の変化: 新人看護師及び緩和ケア病棟における調査から. 日本農村医学会誌, 60 (4), 535-542.

国立社会保障・人口問題研究所. (2023). 日本の将来推計人口 (令和5年推計) 結果の概要[PDF]. pp2023\_gaiyou.pdf (2025年8月10日ダウンロード).

岡田敦, 河野荘子 (1997). 『コラージュ表現とその治療的意義について』精神科治療におけるアート療法の適用に関する研究. 第1巻, 第2号, pp. 61-72.

瀬崎真也. (2007). 創造的アートセラピー. 黎明書房.

横山和仁 (編). (2000). POMS 短縮版: 手引と事例解説. 金子書房.

横山和仁, 下光輝一, 野村忍 (編). (2002). 診断・指導に活かす POMS 事例集. 金子書房.

---

---

Book Review

---

---

**A CLIL Course about the Spread of English as a Global Language  
What are Global Englishes?: A CLIL Course for Learners of English**

Eleanor Kane Hinohara (2025) Perceptia Press

Bethany LACY<sup>1)</sup>\*

**【Abstract】**

This article reviews *What are Global Englishes?: A CLIL Course for Learners of English* by Eleanor Kane Hinohara (Perceptia Press, 2025), a book which discusses the history and spread of English and shows how the language is used in a range of cultural and political contexts. It is written for CEFR A2–B2 learners and takes a CLIL approach to combine language learning with reflection on an important global issue. Each unit follows a clear sequence, beginning with self-reflection and discussion, progressing to vocabulary and reading tasks, and concluding with research, data analysis, and listening activities. One feature that stands out is the inclusion of audio from proficient English users with different backgrounds, which disputes the notion of a single “standard” English and supports the value of students’ own ways of speaking. Country-specific units—including South Africa, Nigeria, Singapore, Japan, and Scotland—highlight how English plays different roles in multilingual societies. The textbook is especially useful for pre-service teachers and for students preparing to study or work abroad. It encourages both language growth and critical awareness of how English functions around the world.

**Key words:** CLIL, global englishes, EFL, world englishes, textbook review

---

---

書 評

---

---

英語がグローバル言語として広がった過程を扱う CLIL コース  
グローバル・イングリッシュとは何か？ — 学習者のための CLIL コース  
エレノア ケイン 日野原 (2025) パーセプシャ・プレス

ベサニー レイシー<sup>1)</sup>\*

**【要 旨】**

本稿では、エレノア・ケイン・日野原著『What are Global Englishes?: A CLIL Course for Learners of English』(Perceptia Press, 2025) を紹介する。本書は英語の歴史と世界的広がりを行い、言語が文化的・政治的文脈でどのように使われるかを示す。対象は CEFR A2 ~ B2 レベルの学習者で、CLIL 手法により言語学習とグローバル課題への考察を結び付けている。各ユニットは自己省察から始まり、語彙・読解タスク、さらにリサーチ、データ分析、リスニング活動へと進む。多様な背景を持つ熟達した英語使用者の音声教材が含まれている点も注目される。これにより「標準英語」という概念を問い直し、学習者自身の英語を肯定する。南アフリカやナイジェリア、シンガポール、日本、スコットランドの事例を通じ、多言語社会での英語の役割の違いを学べる。本書は英語教師を目指す学生や留学・海外就労を準備する学生に特に有用で、言語力の向上とともに英語の世界的機能への批判的理解を促す。

**キーワード:** 内容言語統合型学習、グローバル・イングリッシュ、外国語としての英語、ワールド・イングリッシュ、教材レビュー

---

<sup>1)</sup> Faculty of International Liberal Arts, Juntendo University (Email: b.lacy.nt@juntendo.ac.jp)

[Received on September 2, 2025] [Accepted on December 22, 2025]

## 1. Book Structure

In *What are Global Englishes?*, Eleanor Kane Hinohara presents a comprehensive CLIL curriculum for English language learners to learn more about the history and cultures surrounding the target language. Kane Hinohara does not go as far back as Middle English, à la Chaucer, but she does address how colonization was a direct cause of the spread of the English language. While this topic is uncommon even in textbooks for proficient English language users, *What are Global Englishes?* stands out in EFL settings where the spread of English and its local impacts rarely get sustained attention. Kane Hinohara tackles this difficult topic all while making it accessible to a range of fluency levels through scaffolded tasks and a variety of input.

This historical framing isn't treated as a one-off topic; instead, it is a theme that spans all fifteen units. Each unit is designed to take one class period, though there is room for flexibility for students at lower fluency levels. The units begin with a self-reflection task that asks students to consider their experiences learning English and their thoughts about the language. They then discuss their answers with a partner or small group. After this task, the students listen to a conversation between two proficient users of English discussing their thoughts on the same topics. Together, these activities set students up for the unit's core theme. Next comes a set of vocabulary exercises built around the passage's target words. Each passage explores one issue tied to English's spread, such as EFL/ESL/ELF, colonization, Inner Circle Englishes, Outer Circle Englishes, or Global Englishes. After the reading passages, students complete vocabulary and comprehension tasks. They also work with research and data analysis to examine statistics related to the issue. Students then write a short reflection on what they learned during the unit. Each unit closes with a short listening passage that features a range of English accents and

requires notetaking, followed by peer comparison to check understanding.

The range of tasks is also worth noting. Each unit combines lower-order activities, such as vocabulary and comprehension checks, with higher-order ones like research, data analysis, and personal reflection. This progression keeps lessons manageable for less proficient students while still challenging stronger ones. The listening and discussion tasks give students practice using English in interaction, while the writing and research components develop skills they can apply in academic or professional settings. Together, these tasks encourage students to connect personal experiences with wider social and historical issues, which is seldom a focus in language classrooms.

These data analysis sections stood out to me because they let students interact with statistics and infographics directly. Instead of simply taking in facts, students interpret data, make choices about how to understand it, and link it to other parts of the unit. These tasks strengthen language ability while also sharpening critical thinking and numeracy. The research components push this further, giving students a sense of autonomy as they investigate issues for themselves rather than echoing what they read. Working with statistics and visuals gives a clearer view of the unit's themes and makes the materials feel immediate. It's encouraging to see this kind of activity in CLIL courses, since it supports growth that goes well beyond language learning.

*What are Global Englishes?* is more than a grammar-and-vocabulary textbook (though it draws generously on NGSL vocabulary). It is a course that asks students to think critically about the language they are learning, the histories behind it, and the communities that have contributed to its richness. For learners in EFL contexts, this kind of reflection is rare and valuable. It helps students reflect on their own position as English users while recognizing the perspectives of others. Kane Hinohara succeeds in

creating a curriculum that is accessible to intermediate learners while still engaging for more proficient students and even educators.

## 2. Varieties of English

Many students already know aspects of United States and Canadian culture, and some may also have a basic awareness of Australian culture. South Africa, however, is rarely included in English language learning materials. Placing South Africa after the United States, Canada, and Australia allows students to compare how English developed in each location and observe how South Africa's relationship with the language differs. In South Africa, English is one of twelve official languages, and its history is tied to systemic oppression under apartheid. South African English educators also report discrimination in EFL contexts, often tied to accent, race, or nationality, especially in comparison with other Inner Circle speakers (Dos Santos, 2020). Considering South Africa alongside other Inner Circle nations encourages students to question assumptions that all such contexts share similar trajectories and to think more critically about models of global English use.

One thing I appreciated about *What are Global Englishes?* was its focus not on a single accent, but on the range of English varieties. Most English language textbooks, whether CLIL-based or not, usually present one model of English, most often a standardized North American or British variety. In contrast, Kane Hinohara's audio materials feature proficient speakers from diverse backgrounds, including Scottish, Japanese, and Indonesian, and present their authentic manner of speaking. This exposure pushes back against the native speaker fallacy, a belief that has long influenced classroom practice and materials design (Gedik, 2024). In Japan, as in many other contexts where English is not the dominant language, certain accents and dialects have traditionally been given priority

(Koyama, 2024). There is no mention of "native speakers" in the book; instead, Kane Hinohara uses the more inclusive term "proficient English language users." By hearing a wide range of accents, students are better prepared to communicate with English speakers from other countries and can see that their own ways of speaking English have value.

## 3. Outer Circle and Global Englishes

Just as important as who is heard in the audio is where English is heard around the world, which the book explores in its units on Outer Circle and Global Englishes. Many English language-learning books only focus on the culture of Inner Circle English-speaking populations. *What are Global Englishes?* goes further by including units on Outer Circle countries such as Nigeria and Singapore, as well as contexts where many varieties of Global Englishes are spoken, such as Japan and Scotland. These chapters show students how English operates in multilingual societies, often alongside local or regional languages, and how its role changes depending on historical, political, and social factors. In the case of Scotland, students examine data on Gaelic that shows there are no longer any monolingual speakers, and that nearly all Gaelic speakers also speak English. Working with this type of data allows students to see how languages can lose ground to English over time, and it invites discussion about the relationship between language survival, cultural heritage, and globalization. By studying a range of contexts in which English is used, students can come to have a more complete and realistic understanding of what it means for English to function as a global language.

## 4. Conclusion

### 4.1 Recommendation for Students

This textbook is best suited for CEFR A2–B2 learners, though A2 students may need some addi-

tional support. The mix of tasks, starting with simpler ones and moving toward more complex ones, is practical and purposeful. Students can utilize both academic and communication skills, as well as their own background knowledge, to connect with the content in meaningful ways. Through CLIL, the book teaches language with history and culture from various contexts as its content focus. The content provides students with a new perspective on what it means to be an English speaker and may alleviate concerns about not being from a major English-speaking country. While terms such as “English as a Lingua Franca” may not appeal to all general learners, the course is highly relevant for pre-service teachers and would be beneficial as a required component of teacher training. Importantly, its treatment of difficulty is matched by careful attention to accent and identity, and it does not elevate any single variety as “standard.”

I would recommend this book especially to students who have plans to study, live, or travel abroad, as well as to those preparing to become teachers in any field. It also holds strong value as an elective course for students with interests in history, geography, or international education. For pre-service English teachers, in particular, the book could serve as a foundation for thinking about how to bring issues of World and Global Englishes into their future classrooms.

#### 4.2. Final Thoughts

I have always wanted to include these perspectives in my own courses, and I dislike that prejudices against educators outside the Inner Circle persist even today. A textbook like *What are Global Englishes?* opens a conversation about those prejudices by showing students the diversity of

English and the realities of its global spread. Students have a chance to reflect on their own experiences while also comparing those experiences to wider contexts. In doing so, *What are Global Englishes?* effectively helps students meet their language learning goals and also champions empathy and respect for other English-speaking communities—qualities that are every bit as important for communication as grammar or vocabulary.

#### 5. Notes

The author and publisher provided me with a review copy of *What are Global Englishes?* This did not influence the content of this review.

#### References

- Dos Santos, L. M. (2020). Stress, burnout, and turnover issues of Black expatriate education professionals in South Korea: Social biases, discrimination, and workplace bullying. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 17(11), 3851. <https://doi.org/10.3390/ijerph17113851>
- Gedik, T. A. (2024). Un-teaching native speaker fallacy: A practical application and discussion. In A. F. Selvi & C. Kocaman (Eds.), *International perspectives on critical English language teacher education: Theory and practice* (pp. 192-196). Bloomsbury Academic.
- Hinohara, E. K. (2025). *What are global Englishes?: A CLIL course for learners of English*. Perceptia Press.
- Koyama, E. (2024). Language standards, dialect preferences, and privilege [言語基準, 方言選択, 特権意識]. *Annual Report on Teacher Education, Gakushuin University*, 10, 29-33. <http://id.ndl.go.jp/bib/033547210>

その他

ボストンカレッジでのサバティカル研修報告

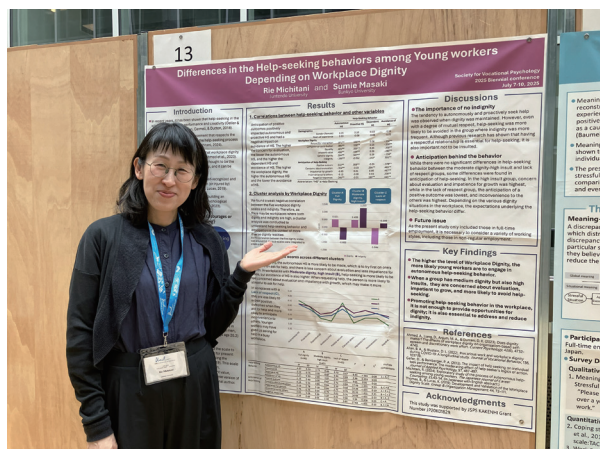
道谷 里英

2025年4月より6カ月間、米国ボストンカレッジでサバティカル研修の機会をいただきました。ボストンカレッジは、1863年にイエズス会によって設立されたカソリック系の総合大学です。ボストン中心部から車で30分ほど離れた場所にあり、自然に囲まれた素晴らしいキャンパスを持つ大学です。

サバティカル研修期間中は、Department of Counseling, Developmental, and Educational Psychology に所属し、社会正義を志向したキャリアカウンセラーの第一人者である David Blustein 教授のもとで研究を行う機会をいただきました。近年、キャリアカウンセリングにおいては、経済的格差や差別等によりキャリア選択の機会が制限された人々への支援のあり方が問われています。そのような状況にある人々を支援する上で、支援者がどのような知識や態度を持ち、どのような役割を果たすべきかを議論する機会に恵まれました。日本ではまだ十分には注目を集めていないテーマであるため、学びを深めながら海外の研究者と議論することによって、日本の状況を客観的に捉えることができました。ボストンは職業指導 (Vocational guidance and counseling) 発祥の地でもあり、自分の仕事の原点に触れる機会となりました。



研修期間中、アトランタで開催された National Career Development Association 大会や、スイスのローザンヌで開催された Society of Vocational Psychology (SVP) 大会へ参加し、世界中の研究者・支援者との交流の機会も得ました。SVP では、職場における尊厳と援助要請との関連について日本で行った調査結果を発表しました。



帰国後は、複数のセミナーや学会で成果報告をする機会や、Blustein 教授による日本での講演の司会を担当する機会も得て、ボストンでの経験が着実に次の研究につながっています。今後は、日本における社会正義のキャリア支援の発展につながる研究や支援プログラムの開発を進めていく予定です。

このような貴重な機会をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。